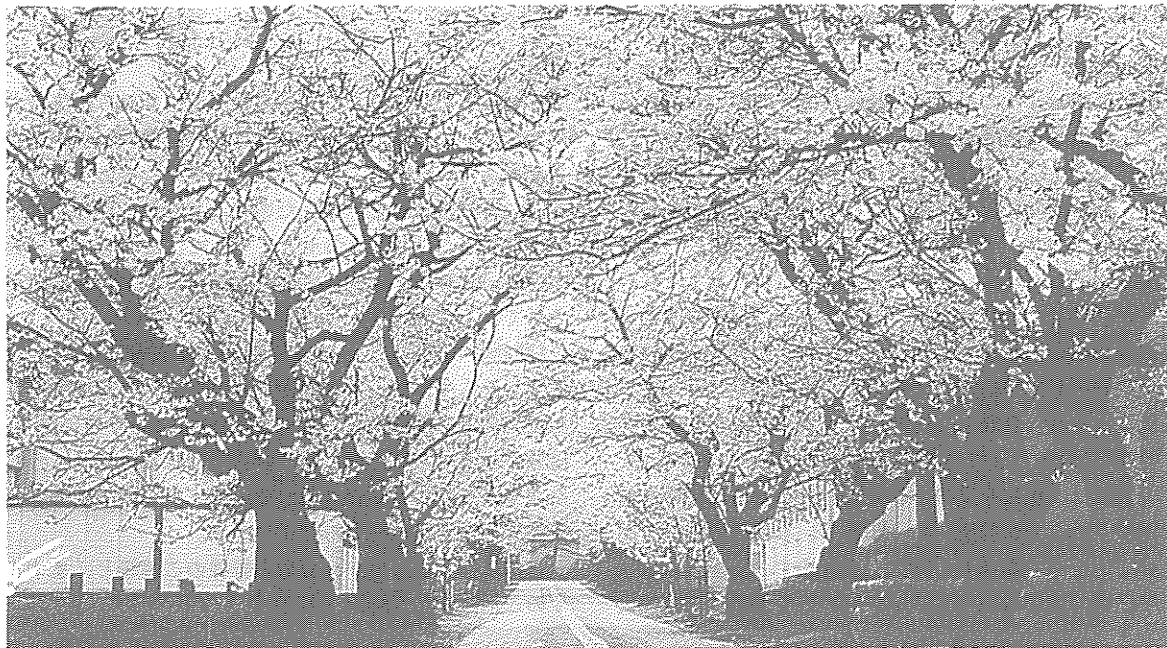


同窓会会報

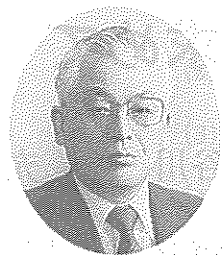
第50号

平成14年8月18日発行

富山県立上市高等学校同窓会



校舎前の桜並木



50年の歴史

同窓会長 中川久尚

同窓会員各位には益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

母校上市高等学校も、学校長をはじめ教職員一丸となって生徒の育成に努力され成果を上げていらっしゃることに深く敬意を表します。

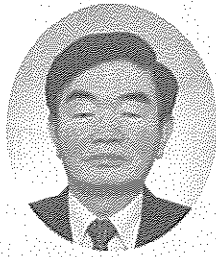
「同窓会会報」も母校と会員をつなぐ架け橋としての役割を果たしながら、50号発刊の運びとなりました。ご存じの通り本同窓会では卒業後10年ごとの節目の皆様方にご案内し、恩師や旧友を囲んで思い出を語り旧交を深める場として、各卒業年組の集いの開催をよびかけております。この会報も卒業50年組の方々とともに、50年の時を刻んでまいりました。

その歴史を紐解きますと、今日の「同窓会会報」が創刊されましたのは、昭和28年8月16日のことです。昭和23年に新制高校がスタートし、翌年8月に新同窓会が発足。前身である「同窓会だより・母校だより」が、25年

8月の第2回総会を機に、ガリ版刷りで発行されました。その紙面冒頭には「旧上市農林、旧上市高女、新制上市高校の同窓会が統合して上市高等学校同窓会として産声をあげてから満1年になりました。同窓各位の社会的活動の分野も広く、三千同窓の血のつながりも親しみ深いものとなっています。」と記されています。

それから3年後に正式に発刊された「同窓会会報」第1号では、前年の「創立30周年記念式典の概要」「新制5周年記念行事」という記事が目玉となっていました。また、31年発行の「同窓会会報」第4号には「校旗樹立式典」の記事が掲載され、校旗樹立に關しての経過や校旗デザインの由来が説明されています。

このように着実な歩みによって伝統がつけられてきました。創校以来一貫した校訓「勤労・自治・向上」の精神で育まれた同窓生が、今後とも伝統ある母校を愛し、友情溢れる同窓会として本会が躍進するよう願っております。



有朋自遠方来、 不亦樂乎

校長 布村 清嗣

家庭看護・福祉の授業で、特別講師をお願いしているY先生の最後の講義が、先日行われました。授業の後、校長室で先生にご挨拶した折に、先生が本校の卒業生であることを知りました。先生には、看護実習等でもお世話になっており、そのことを申し上げると、母校の後輩に役立つことが嬉しいと、おっしゃっていただき、私のほうが恐縮してしまいました。そう言えば、6月の災害避難訓練の折、指導をいただいた消防士の方も、本校OBだとおっしゃっていたのを思い出します。

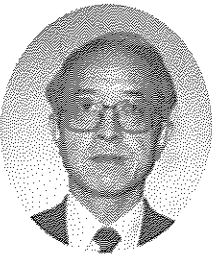
私は、本校に着任して1年4カ月あまりになります。その間に、公務としていろいろな方にお会いしましたが、その中には、本校を卒業された方、あるいは以前に本校で勤務された方が結構いらっしゃり、本校への思いを聞かせていただく機会もしばしばあります。

学区制の関係もあって、上市町の若者が挙って本校入

学をめざした頃のこと、丸山農場で泊まり込みの実習が行われていた頃のこと、本館の鉄筋化に遅れて、南館がまだ木造だった頃のこと、馬術部の馬が、今のグラウンドの中にまで練習に繰り出した頃のことなど、回顧談に話題が移ると、話は尽きません。そして、その方々に共通なのは、一様に上市高校で過ごした日々を大切なものとされていることです。

『論語』の冒頭に、有名な「朋あり、遠方より来たる、亦樂しからずや。」の一節があります。その高校で学ぶという共通の道を歩んだ者が、機会を得て、学校に戻り、後輩を指導することは、珍しいことではないでしょう。ただ上市高校では、その数が比較的に多いのではと、感慨深く思っているところであります。

末筆になりましたが、会員の皆様のご健勝と、ますますのご活躍を祈念申し上げます。



学校スピリットを求めて

教頭 長谷川 充

本校へ着任して2度目の夏を迎えています。住まいする八尾の街から職場に向かうスーパー農道を運転する朝、神々しい光に包まれた立山連山の姿はその日の上市高校と観える私の気持ちを引締め、高めてくれます。そのすばらしさに心から感謝している日々です。それはまさに、家持が「たち山の、雪し来らしも はひつきの 川の渡り瀬 あぶみつかすも」と詠んだ気持ちに通じるのではと思い、内心ほくそ笑んだものです。

さて、本校について何の予備知識もなかった私ですが、上市と言えば、峻峰劔岳や穴の谷霊水が直ちに思い浮かびます。21世紀のキーワードである「豊かな環境」・「水と緑の豊かな自然」が生き生きと息づく学園を強くイメージして参りました。先入観が引き起こした皮肉なのでしょうか、着任時に相反する出会いを経験しました。一つは、「年輪に萌ゆる若葉の影かさね」と詩い、究極の理念「持続可能な地球社会」に通じる本校建学の精神を

感じさせる農林工学科記念碑との出会いでした。他方は、本校の歴史的なアイデンティティーと触れ合うことができるという私的期待を見事に裏切ってくれた校舎や校庭との出会いです。「箱もの」と揶揄される事が多いこの頃ですが、「多様性」が我が物顔に闊歩する時代であればこそ、学び舎の歴史に通底するスピリットを無言で生徒に伝えるものが必要ではないのでしょうか。

また、このことと不可分なことです。本校が総合学科としての特色を磨くためには、系列各分野を束ねる学校コンセプトが不可欠です。私見ではありますが、「アメニティーとヒーリング」を実現する地域社会を組織し、活動する能力育成こそが相応しいと考えます。

おわりに、本校が今後も地域社会から認められる教育を実践し発展するために、同窓生諸氏の温かいご支援、ご鞭撻をお願いして筆を置かせていただきます。